

若者の地域移動はどのような 状況にあるのか —地方から都市への移動を中心に—

労働政策研究・研修機構／日本学術会議特任連携会員

堀 有喜衣

問題意識 若者の地域移動言説再考

「最近の若者は地方から都市（大都市圏）に流出するようになってきている」という言説は本当なのだろうか？

①社人研『人口移動調査』（2011）の二次分析

世代別に若者の3時点の地域移動パターンについて、全体像を把握する。調査は「国民生活基礎調査」実施に際して層化無作為抽出された地区からさらに無作為抽出された288地区の全世帯・全世帯員に対して実施（岩手・宮城・福島除く）。学歴が高卒者以上10,053人が分析の対象となった。以下の分析はすべて初職正社員に限っている。

②『若者の地域移動に関するインタビュー調査』（2013）

マッチングの実態について事例を通じて把握する。事例の選定については地元のハローワークを通じ、高校については2007年調査と同一の高校について、大学については地域移動者が多い大学という条件で新たにハローワークより依頼。

<青森> 青森Gハローワーク・青森A商業高校・青森B工業高校
・青森C高校・青森A大学・青森B大学

<高知> 高知Kハローワーク・高知A商業高校・高知B工業高校
・高知A大学・高知B大学・高知C大学

※青森県は大学が9校あり、うち3校が国公立。高知は大学が3校。

(1) 若者の地域移動の全体像の把握

『第7回 人口移動調査』（2011年実施）の二次分析

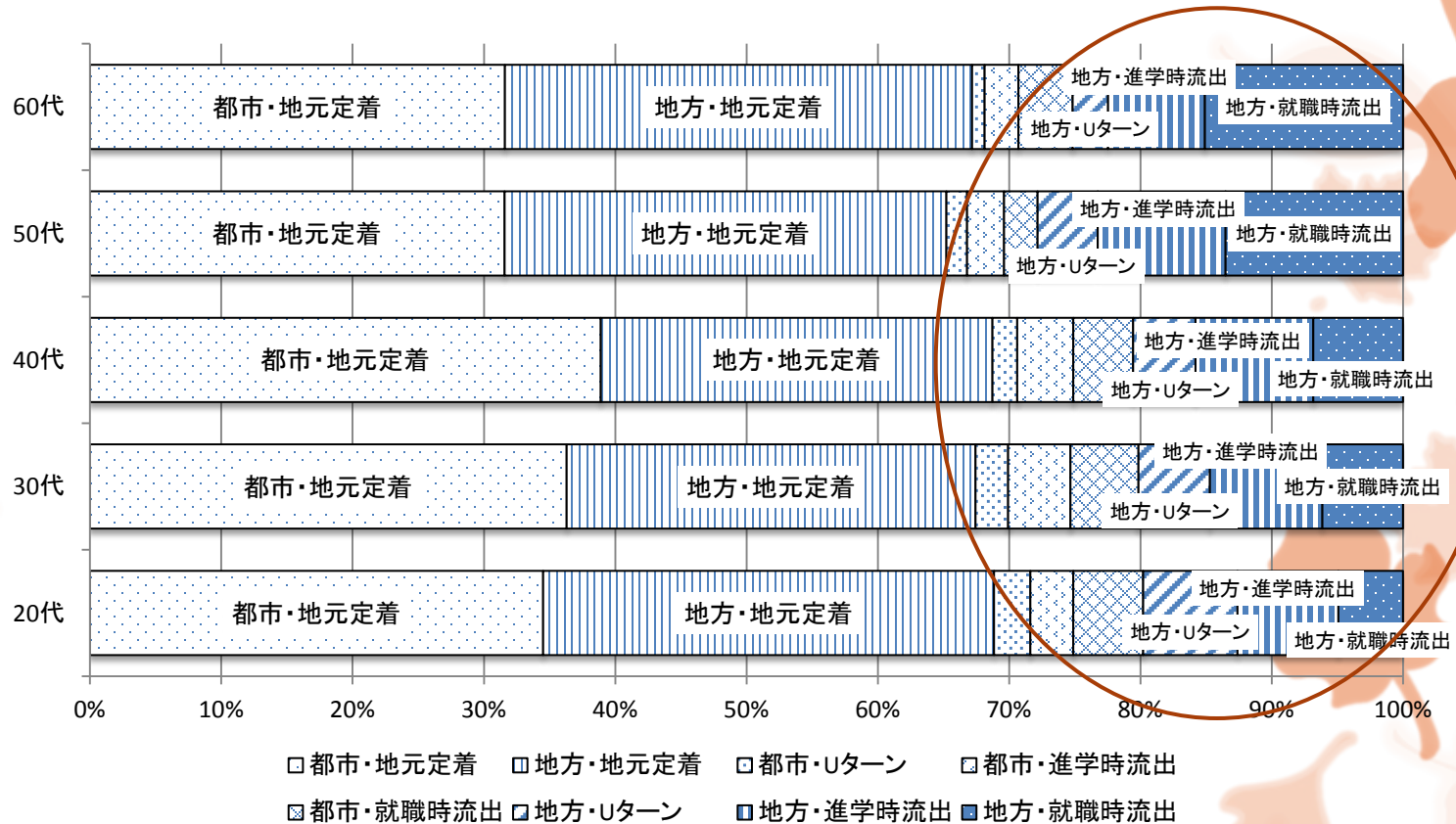
出身地	O(origin)	中学卒業時の居住地
進学地	E(education)	最終学校卒業した時の居住地
初職地	J(first job)	初職時の居住地

の3時点について地域間移動のパターンを8類型（都市／地方×定着／Uターン／流出）に分類。

先行世代に比べて現代の若者の「地方・地元定着」傾向が強まっている。特に高卒者で顕著だが、男性大卒者や女性の専門・短大・高専卒業者においても進学時に都市部に流出しなくなり、男性大卒者でも「地方・地元定着」や地方・Uターン割合が増加。

世代別O-E-Jパターン（男女計）

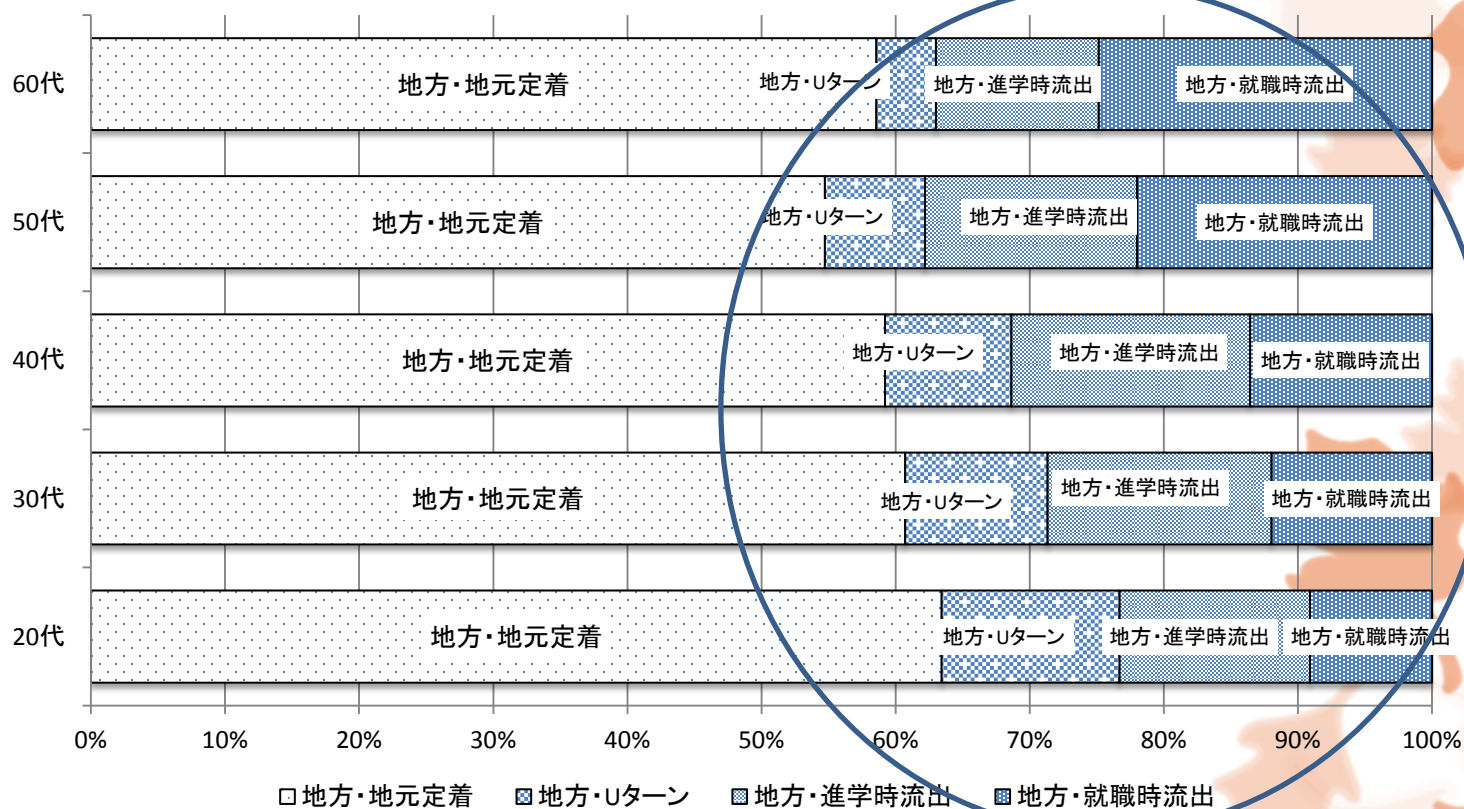
＊「地方・進学時流出」「地方・就職時流出」が全体に占める割合は減少している。



資料出所：喜始（2015）より作成

出身地が地方の若者： 男女計・世代別O-E-Jパターン

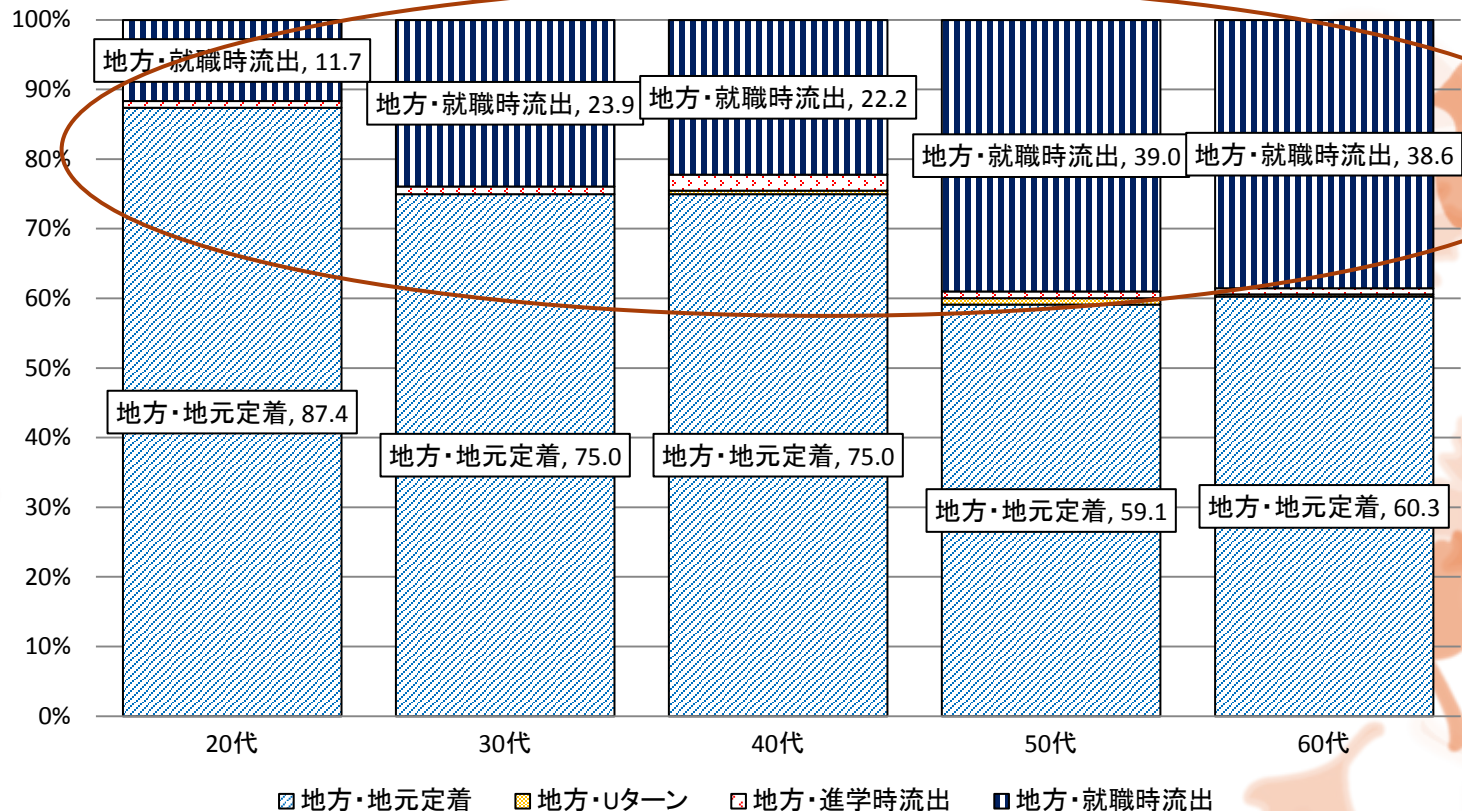
* 地方・地元定着の割合が高まり、進学時・就職時
ともに地方から都市に流出する割合低下



資料出所：喜始（2015）より作成

地方出身男性：高卒 世代別O-E-Jパターン

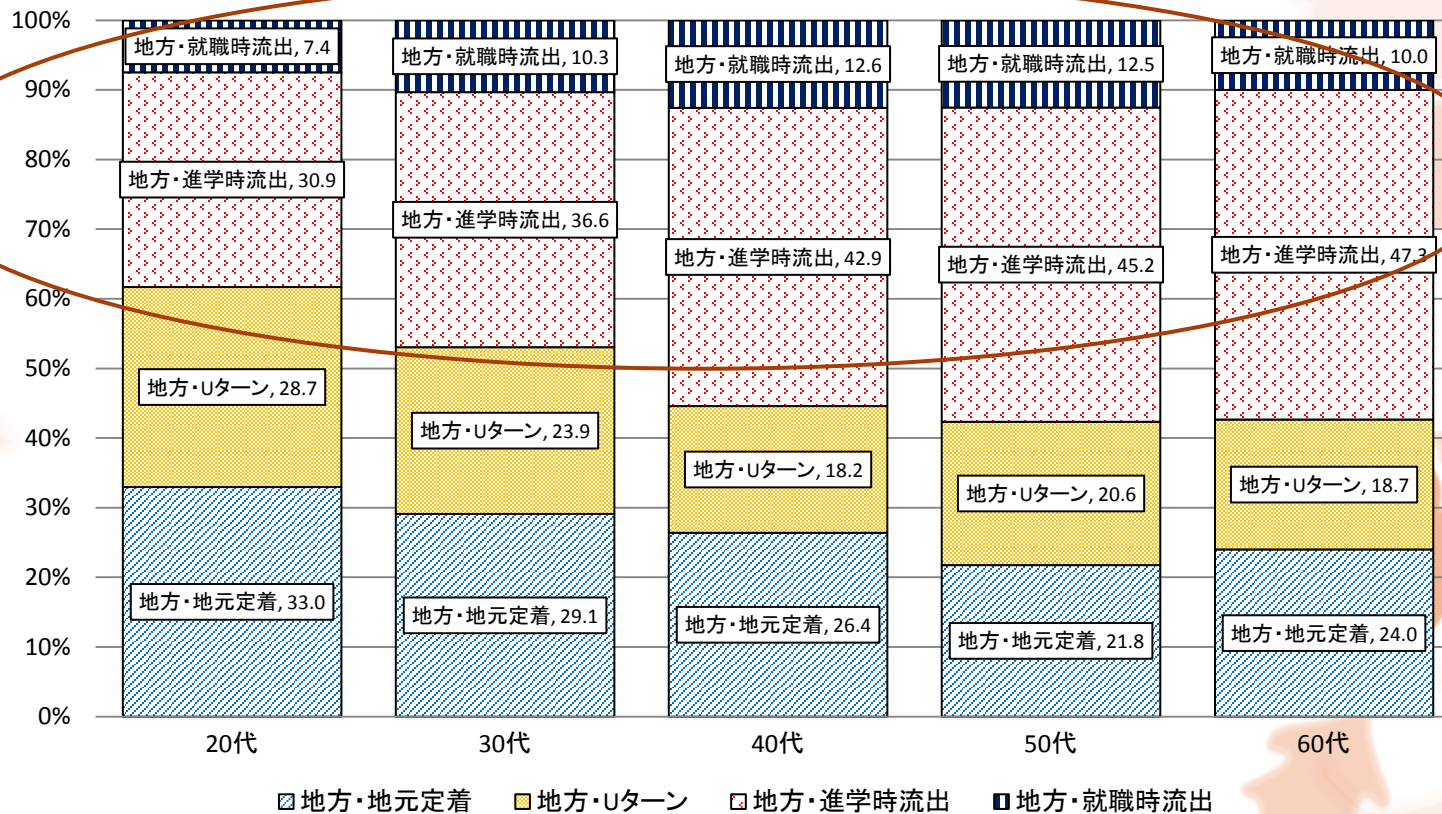
* 地方・地元定着の割合が高まる。



資料出所：喜始（2015）

地方出身男性：大学・大学院卒 世代別O-E-Jパターン

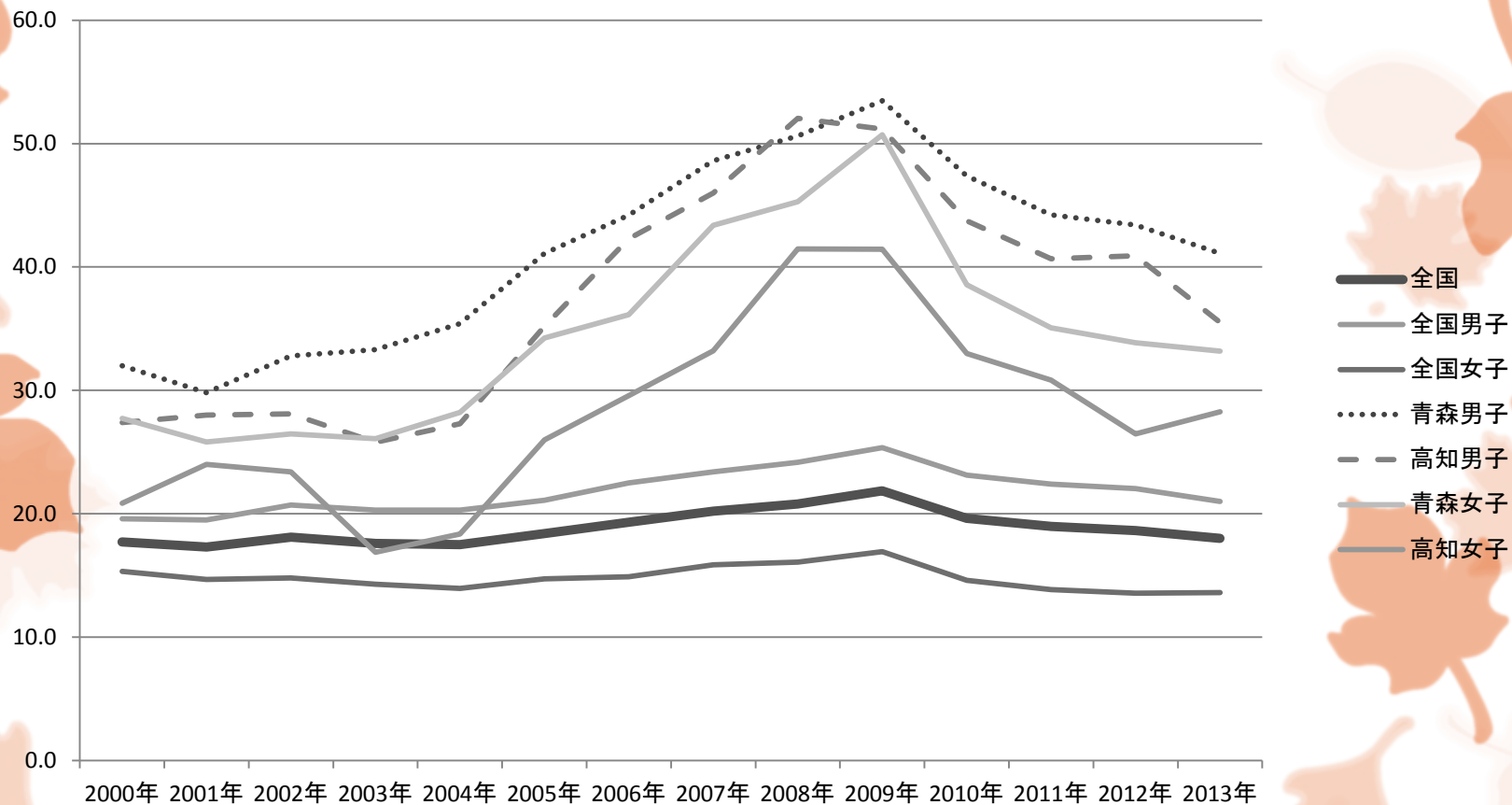
* 地方・地元定着、地方・Uターン割合高まる。



資料出所：喜始（2015）

(2) 高卒就職における地域移動の現状

2000年以降の高卒者の県外就職率の推移：青森・高知



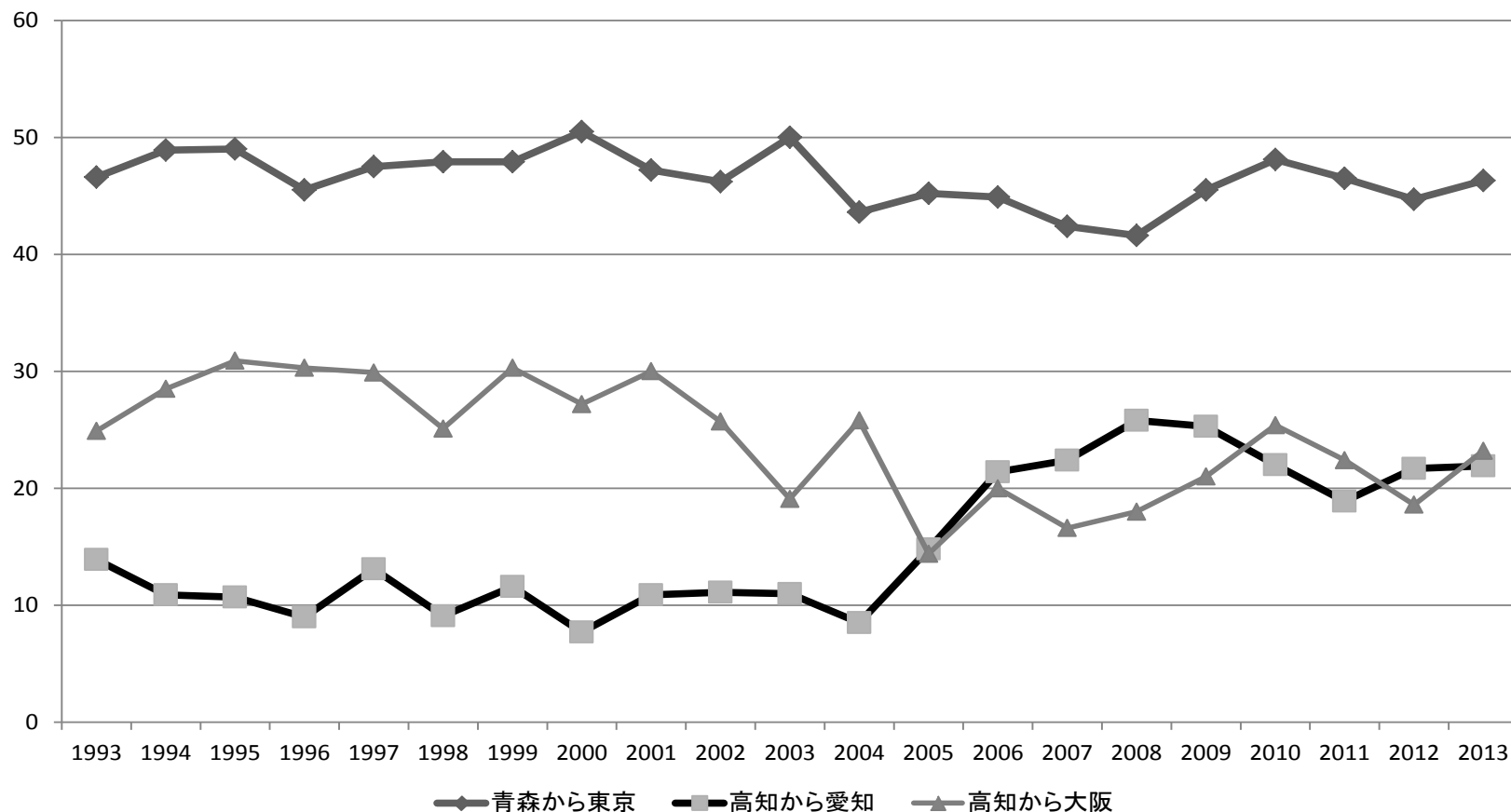
対照的な県外就職者の就職先

青森県男性：製造業27.0%・サービス27.9%

高知県男性：製造業50.0%・サービス14.8%

⇒「県外就職」内実は異なる

青森県・高知県の高卒就職者の移動先地域の推移 (男性) * 地域間の結びつきの安定性



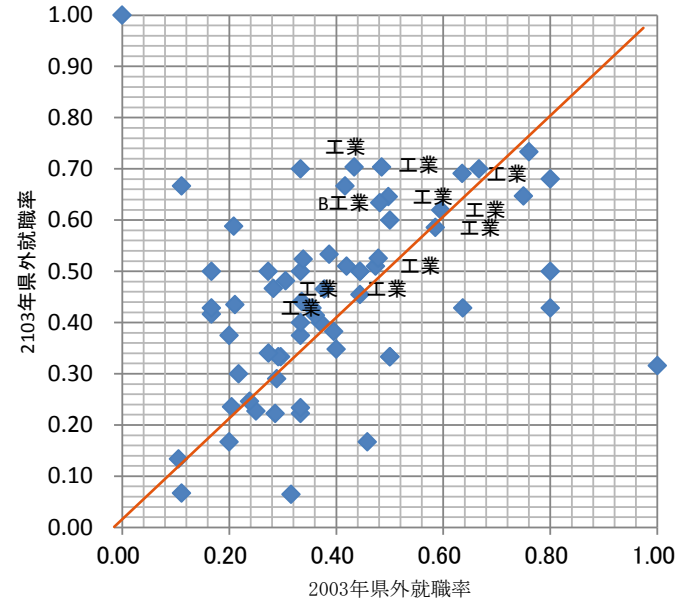
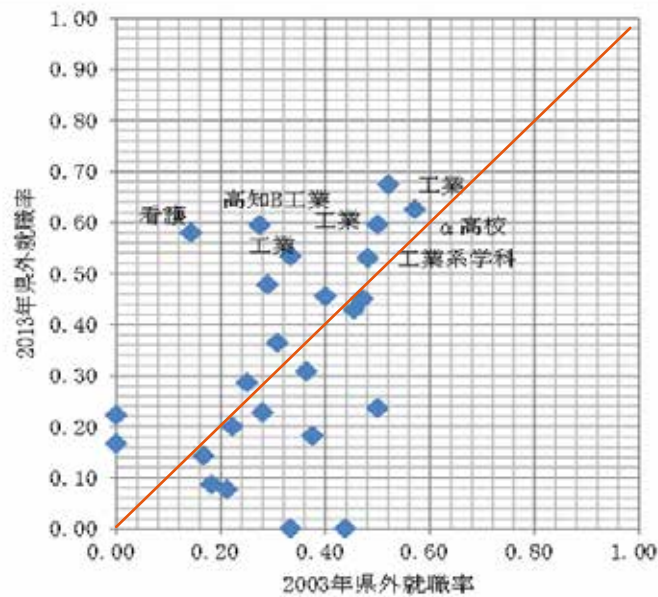
9
高卒就職者に対する求人
における製造業割合：
愛知>大阪>東京

資料出所：文科省『学校基本調査』各年度

2003年／2013年の高校単位での 県外就職率の分布（全日制・男性）

高知：地域移動が工業高校
に集中

青森：地域移動は工業高校
のみに集中してはいない



青森B工業

地元に残りたい＝自信がない

「（県内求人だからという特別の指導のポイントはありますか？）地元はほとんど厳しいので、半分ボランティアの、青森に地域活性化とか、そういう思いを持って臨んでねという。そのぐらいの意気込みで行ったほうがやりがいあるんじゃないのかなと。・・・(中略)・・・ 同級生と休みに会ったりしますよね、半年たって。もう全然、(県内と県外の労働条件では)雲泥の差があるわけです。でも、本人は地元に残りたいと選んだわけですから、やはりそれは何でいるのかということですよ。地元で貢献しているところがやっぱり。」

（地元に残りたいという子の特徴は？）親を面倒見なければとか、将来家にやっぱり残らなければとか、親が共働きでまだ兄弟が小さいのでとか。事情はそれぞれありますよね。あと、自分で生活ちょっと自信がないとか。1人で生活するのが自信がないというか、そういう子もいます。」

高知B工業

県内に残りたい＝自信がない

「（生徒の地元志向が強いかと言うと）あんまりそういうわけではないですね。変な言い方をすると、うちの学校の中では、就職でいったら、県内就職と県外就職だったら、県内就職のほうがマイノリティーですから。県外に出るほうが多数ですから、それに対しての抵抗というのはあんまりないですね。ただ、親御さんの思いとか、本人の思いとして、そういうふうな声があることは知っています。ただ、現実問題考えたときについていう。あとは選択肢も多いです、県外のほうが。」

「今年は比較的県内の希望が多い年だったんです。（今年が多かった理由は）生徒の性格的なものだと思うんですけど、私の目から見てなんですけど、非常に自分の自信のない子が多いかなと。だから、あんまり外に出たがらない子が例年より多いと。」

限られた範囲の中での地域移動

- ①需要不足地域の高校就職指導は生徒の地域移動に対する水路付けを行っており、生徒が地域移動をする後押しをしていると見られた。
- ②地域移動のパターン—どこからどこに移動するのか—というのは、マッチング機能（高校就職指導）の歴史的経緯に依存する部分が大きく、安定しているといえる。
- ③出身地域がどこの都市と結びつくかによって、誰が移動するか、あるいはどんな仕事に就くことになるかが規定される。移動先地域は基本的に安定的であるため、移動先の産業構造によって需要（誰が移動するか、どんな仕事に就くか）が異なることになる。

(3) 大卒就職における地域移動と就職支援

○ 「大卒労働市場は全国区の大きな市場」

⇒大学の選抜性（選抜性の低い私立大学の就職においては大学の関与が重要）や、専攻（理系の一部の大学では大学関与がまだ存在）による違いが存在。就職活動開始時期・面接や内定企業数等には地域差がある（労働政策研究・研修機構2007）。

⇒進学時については、地元ブロック内での進学が主流（『学校基本調査』より）。

地方大学の就職部・キャリアセンターによる地域移動についての認識と支援の特徴とは？

地域移動に関する大学就職部の認識

- 大学は基本的に学生の「主体性」に任せており、就職地についての指導はほとんどない。
- 進学移動をしておらず、さらに地元就職を目指す学生は地元に対するこだわりが強いというよりは「視野が狭い」こともあると大学は認識。
- 就職活動において親の影響が大きく、特に就職先地域について親の希望を察知し、地元就職を考える。特に女子学生（とその保護者）に顕著。
- 地方の学生は就職活動にお金と時間がかかり、就職先が限定されやすい。「東京に出ようと思いつつも、経済的な側面で身動きが取れなくなって近場の就職をする」

若者の地域移動を「社会学的」に捉えていくために

若者の地方から大都市への地域移動は近年減少傾向にあり、またマッチングにおいても若い世代の地域移動のチャンスは制約されている。

自明のように見える「地方からの若者流出説」は、現象を正しく捉えているのだろうか？

今後の議論に対して社会学的な見方が貢献できることは何か？

参考文献

堀有喜衣, 2015, 「高校就職指導が地域移動に果たす役割ー青森と高知を事例として」 労働政策研究・研修機構, 『若者の地域移動ー長期的動向とマッチングの変化ー』 JILPT資料シリーズNo.162.

喜始照宣, 2015, 「進学・就職に伴う地域間移動のパターンとその推移ー第7回人口移動調査による検討」 労働政策研究・研修機構, 『若者の地域移動ー長期的動向とマッチングの変化ー』 JILPT資料シリーズNo.162.

中島ゆり, 2015, 「大卒就職における地域移動と就職支援」 労働政策研究・研修機構, 『若者の地域移動ー長期的動向とマッチングの変化ー』 JILPT資料シリーズNo.162.

労働政策研究・研修機構, 2007, 『大学生と就職』 労働政策研究報告書No.78.

参考：出生年（第7回調査）

10代	：	1991年～2001年生まれ
20代	：	1981年～1991年生まれ
30代	：	1971年～1981年生まれ
40代	：	1961年～1971年生まれ
50代	：	1951年～1961年生まれ
60代	：	1941年～1951年生まれ
70代	：	1931年～1941年生まれ
80代以上	：	～1931年生まれ